甲斐の系譜

新時代を拓いた郷土の先人たち

山梨県は日本の近代化に大きく貢献した偉人を数多く輩出している。自主性、公共性、開拓精神という甲州人の気風に基づいた先人たちの挑戦と功績を紹介する。

近代日本の基盤形成に貢献

甲州財閥率い鉄道、電気に投資

甲州財閥の開祖 若尾逸平（1820―1913）

（山梨中銀金融資料館所蔵）

天秤棒一本で行商

「甲州財閥」は明治から昭和初期にかけて、鉄道やガス、電気、銀行など幅広い事業に参入し、日本財界の一大勢力となった県出身の実業家たちの総称だ。その〝開祖〟として君臨したのが若尾逸平である。

若尾は明治維新から約50年遡った文政3（1820）年、巨摩郡在家塚村（現南アルプス市在家塚）の貧農に生まれた。水に乏しく、「月夜でも焼ける」といわれるほど痩せた土地で採れたたばこや綿などを天秤棒一本に担ぎ、20代で行商生活をスタート。甲府や江戸を往来しながら数々の苦難を乗り越え、商才と不屈の精神を磨いていった。

やがて激動の幕末を迎え、横浜港開港に商機を見出した若尾は、外国人相手に甲州産の生糸や水晶を売りさばいて財を成す。甲府市山田町（現中央2丁目）に若尾本店を構えて製糸業にも参入したほか、山梨中央銀行の前身・興益社（後の第十国立銀行）設立に携わった。

公益性の高い事業に投資

さらに西南戦争後の「松方デフレ」で土地を集積し県内一の地主へと成長すると、日本の近代化を担う企業に次々と投資していった。

「投資するなら将来性のある乗り物とあかりだ」。後に「鉄道王」と呼ばれた根津嘉一郎にそう説くなど、鉄道と電力への投資の有望性に早くから目を付けていた若尾は、東京馬車鉄道（現東京都電車）を買収。甲州財閥はその後20年以上にわたり、東京の鉄道経営の中心にいた。

次に買収に成功したのが当時「日本一の会社」といわれた東京電灯（現東京電力）だ。若尾は根津嘉一郎、小池国三ら甲州財閥の資金力を総動員して、経営権を掌握した。鉄道の発展と共に電力使用量は拡大。まさに若尾の予言が的中した。

若尾本店（出典：「若尾逸平」）

中央線の開通に尽力

商人としての基盤を確立していくにつれ、社会的地位も向上した。明治22（1889）年、甲府に市制が施行されると、初代市長に就任。続いて貴族院議員となり、鉄道会議メンバーとして中央線の開通に尽力した。近代日本の基盤形成に貢献した若尾の偉業は、今も私たちの暮らしに息づいている。

◇　◇　◇　◇

開国橋建設に出資

若尾は故郷の発展にも力を入れた。行商時代、在家塚から甲府への道をさえぎった釜無川に橋を架ける計画が持ち上がると、一も二もなく賛成。貧困な村財政では負担しきれなかった建築費用7752円の約3分の1に当たる2500円を出資した。明治32（1899）年、木製の「開国橋」が完成。名称は若尾が「我が峡の進運を敏速ならしむる」との意味を込めて命名した。

若尾と開国橋をめぐってはこんなエピソードも残る。野呂川疎水事業について西郡（釜無川以西の地域）の有志と話し合うため、番頭をお供に人力車で開国橋を渡ったときのことだ。

昭和8年にコンクリート製になる前の木製の開国橋（「白根町誌」所収）

番頭が橋番に橋銭を払うと若尾は、建設費を支援した自分が橋銭を取られるはずがないと主張。番頭に取り戻してくるよう命じた。しかし番頭はわずか一銭を取り戻すのはばつが悪かったため「その一銭は私が出します」と答えると、若尾の怒りが爆発。「逸平がお前から一銭の援助を受けられるか。出さなくていいものを出す、お前の考えが惜しい。これから世に出る若い者がそんなことでどうする」と処世の演説を始めた。

橋のたもとで若尾を出迎えようとしていた在家塚などの有力者たちは、この演説に耳を傾け、「逸平翁橋銭百文の演説」として西郡の語り草になったという。

一代で巨財を成した若尾だが、商才と努力だけでなく、勤倹節約もその一助となっていたことを伝える逸話である。

偉人の言葉

株を買うなら将来性が無ければ望みがない。それは「乗り物」と「あかり」だ。

広告のお問い合わせは　山梨新報社まで☎055（237）8121